

研究主題

自他を認め、安心して学び合えるなかまづくり

教科・領域 全教科・全領域

1 主題設定の理由

本校は、鈴鹿市西部に位置し、児童88人が在籍する全学年が単学級の今年創立150周年を迎える歴史ある学校である。本校が立地する地域は、三世同居の家庭が多く、大人が子どもに手厚く関わり、「地域の子」として大切にされている。新興住宅地がないという土地柄、転出入も少なく、入学時から学級の顔ぶれも変わることなく学年が上がっていき、校内の雰囲気も何処となく家庭的である。

落ち着いた環境にありながら、「全国学力調査」や「みえスタディチェック」の結果では特に「読むこと」「書くこと」に課題があることが見えてきた。そこで、令和5年度から、教科を国語科にし、「説明的な文章」の学習を通じて、文章構成の基礎基本を学び、正しく文章を読み解く力を醸成することによって、習得した知識・技能を活用し、自分の思いや考えを豊かに表現する力を育成してきた。令和6年度は鈴教研の研究委託による研究発表会を経て、一定の成果は得られた。

しかし、一方で、自分に自信がもてずに自分を出せなかったり、顔ぶれが変わらないことで決めつけがあったり、人権課題に対して当事者意識がないといった姿が見られたため、安心できる学級づくりの大切さを再認識することとなった。

そこで、今年度は、研究主題を「自他を認め、安心して学び合えるなかまづくり」とし、

1 自分を大切にする(自己肯定感を高める)

2 友だちを大切にする(他者を認め合える)

3 本音が言える仲間づくり(安心できる空間づくり)

を目指していきたいと考える。

2 研究の主な考え方

(1) 自他を認め とは

・自分を知ることから始まる。いいところばかりではなく、ちょっと短所に感じることもすべて自分、それがあってこそ自分らしさであると、受け止められることである。

・友だちに対しても同様である。友だちをよく知り、良いところはもちろん、苦手としていることもまるごと理解し、協力し合える関係を構築する。

(2) 安心して学び合える仲間 とは

・わからないことがわからないと言える、失敗できる、励まし合える、いけないことはだめと言えたり見逃さないでいたりできる。飾らない素顔の自分でいられるそんな空間が学級であること。

3 目指す児童の姿

自分を大切にし、自分の思いを表現できる子

友だちの思いを受け止め、認め合える子

身近な人権課題に気づき、仲間として差別をなくそうと 行動できる子

これらのめざす子ども像を児童自身にも意識させるため、各教室に以下の内容を掲示する。

低学年

じぶんのことをともだちにしてもらおう。

ともだちのはなしをよくきいてしよう。

ともだちをたいせつにしよう。

中学年

自分のことや思いを友だちに伝えよう。

友だちの思いをよく聞いて知りつながろう。

友だちと協力し学び合おう。

高学年

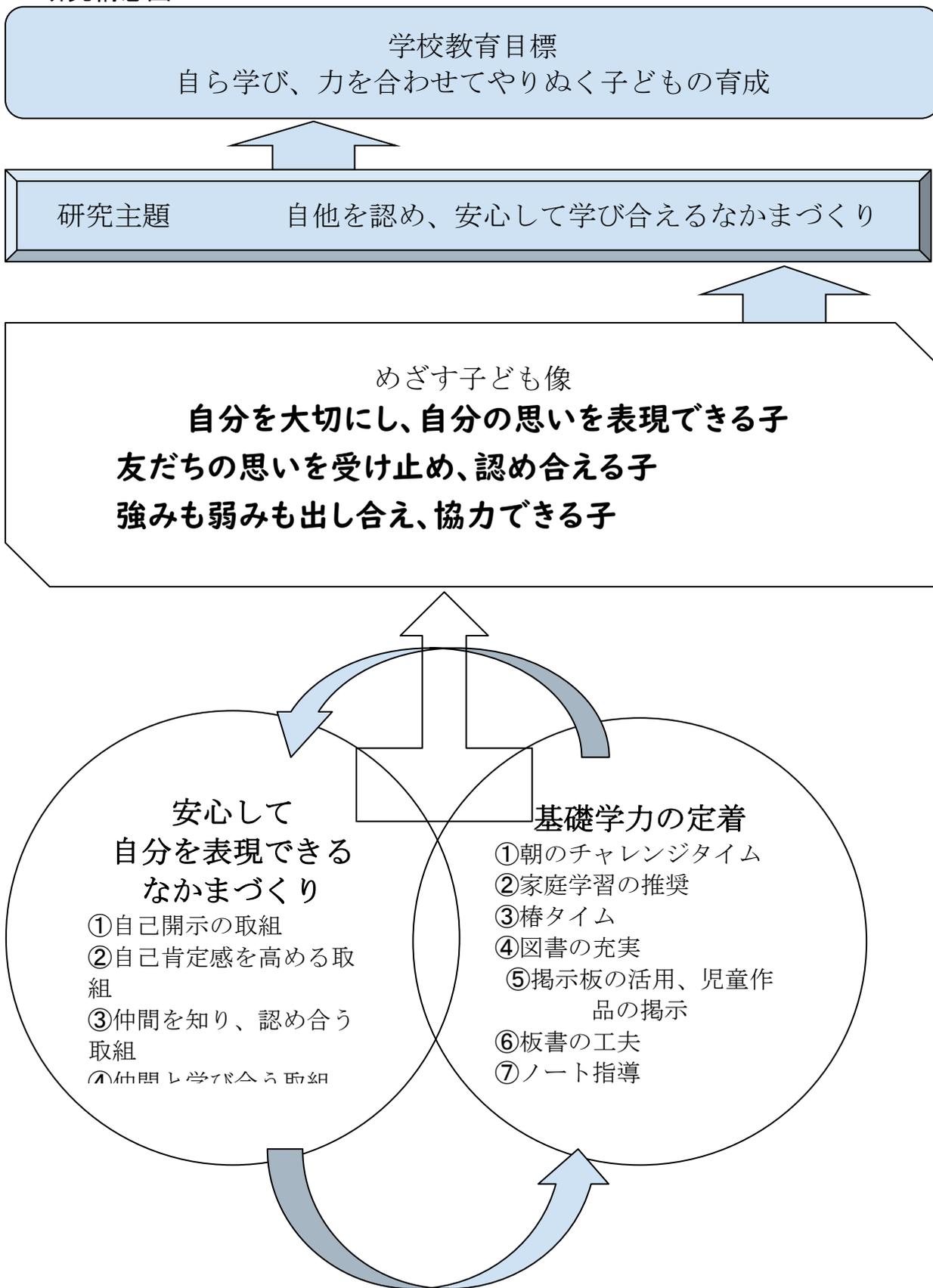
自分を理解し、自分の思いや考えを伝えよう。

友だちの思いや考えを受け止め、理解しよう。

苦手なことも出し合え、協力できる仲間になろう。

身の回りの課題に対して自分から行動しよう。

4 研究構想図



5 研修内容及び方法

(1) 安心して自分を表現できる仲間づくり

- ①自己開示の取組
- ②自己肯定感を高める取組
- ③仲間を知り、認め合う取組
- ④仲間と学び合う取組
- ⑤子どもたちの主体性を高める取組

○縦割り班活動

本校は、学校行事・学校生活において、縦割り班活動を積極的に取り入れている。

「わくわくタイム」は、全校児童を縦割りにして行う班活動で、月に1回、業間休みに異年齢でのふれあい遊びを行っている。6年生が中心となって、自分たちが考えたその時間の遊びを担当教員に提案することや、下級生に遊びのルールを分かりやすく説明することで、相手に応じた話し方や答え方を身に付けている。下級生は上級生との関わりから話し方や答え方を学び、言葉で友だちとつながる経験を積んでいる。また本校では、清掃活動において「縦割り掃除」を実施している。1・6年、2・5年、3・4年がペア学年となり、毎日校内清掃に取り組んでいる。上級生が下級生に掃除の仕方を分かりやすく教えたり分担を提案したりするようにし、互いに関係を深めながら主体性を高めている。

○ポジティブカードの活用

中学校区で取り組んでいるカードである。〇〇さんへ いつ、どこで、どんなところがよかったかを記入して掲示する。普段から友だちのよいところ・よい行動を見る習慣が付き、自分の良いところや行動を肯定してもらうことで、自分に自信をもつことができるようになる。と考える。

○日記・作文

普段から「書く」ことに抵抗をなくすため、作文や日記を書く活動を行っている。「書く」ことに抵抗がなくなれば、自分の気持ちも抵抗なく書いて表現できるようになることをねらっている。

○スピーチ

日朝や帰りの会で、自分の気持ちを伝えるスピーチ活動に取り組む。「書く」よりも「話す」が得意な児童にとって、自分の気持ちを表現できる場を作ることがねらいである。また、「話す」人がいれば、「聞く」立場もできる。友だちの話や思いに耳を傾け、思いを受け止められる児童を育てるには、「聞く」ことが大切と考え、「聞く」ことのできる児童を育てる取組でもある。

(2) 基礎学力の定着のために(研究の基礎となる取組)

学力の定着を図るために、学習の基となる平素の取組が重要になる。

①朝のチャレンジタイム(月・金)

○読む書くワークシート・よむ YOMU ワークシート

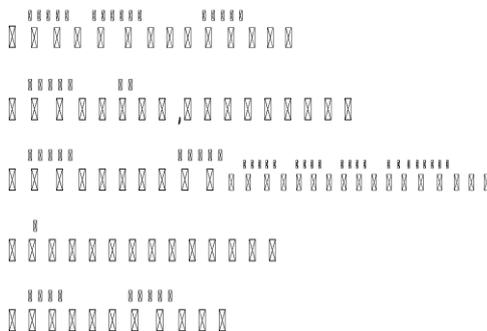
令和4年度から、児童の「読む力」・「書く力」を高めることを目的に、「読む書くワークシート」・「よむ YOMU ワークシート」に取り組んでいる。低・中・高の学年部で、取り組む曜日を統一し、朝学習(8:40~8:55)の一つとして実行している。基礎基本の学力をつけるとともに、児童の取組状況や「読む力」「書く力」の定着を丁寧に観察することで、児童の現状把握にも生かしている。

②家庭学習の推奨

児童が基礎基本の学力を定着させるためには、家庭学習が重要であると考え、家庭学習の強化を推進している。年度当初に「家庭学習のてびき(椿小学校)」とその要点をまとめた「家庭学習UP5!」を児童全員に配付し、家庭での学習環境を整えられるよう保護者、児童に啓発を行っていく。また、令和5年度からは、「家庭学習の進め方」も配付し、児童の家庭学習の習慣化を図っており引き続き今年度も継続していく。



【家庭学習の手引き】



【家庭学習UP5!】

【家庭学習の進め方】

【自主学習ノートの手引き(低学年用)】

学習内容の定着を図るために、音読・漢字・計算の3種類の宿題をほぼ毎日出すことにしている。加えて、週に1回以上、作文や自主学習ノートに取り組む機会を設けている。特に自主学習については、「自主学習ノートの手引き」を全学年に配付し、自主学習の意義や取り組み方を分かりやすく解説している。

さらに、ICT 機器を活用した家庭学習も徐々に増やし、ドリルパークを活用した問題演習や新出漢字の学習やドキュメントを用いた感想文など、個別最適な学びを家庭でも進められるように取組を進めている。

○中学校区で統一した学習・生活改善に向けた取組

鈴峰中学校区では、毎学期に1度、「家庭学習強化週間」を設定している。鈴鹿市の重点取組でもある学習時間・読書時間・スクリーンタイムの3項目についての改善に向け、1・2学期は「家庭学習・読書強化週間」、3学期は「親子読書&メディアコントロール強化週間」として取り組んできた。学習時間は、(1日 10分~15分×学年)を目安に、各児童が目標時間を決めて、保護者と一緒に家庭での学習や過ごし方を意識する期間としている。児童の家庭状

況によって差はあるが、協力的な保護者が多く学校と家庭が連携することができる取組の1つとなっている。

③ 稽タイム

稽タイムは、学力向上をめざし、3年生～6年生の児童を対象に、ひとつ前の学年で学んだ内容を復習することで、学力を定着させる取組である。月曜日の6校時に年間5回実施している。算数のドリルを自らのペースで解いていき、学習ボランティアに1ページずつ採点をしてもらうようにしている。算数に苦手意識のある児童には、教員が個別指導を行い、学習内容をしっかりと定着できるようにしている。

④ 図書の充実(辞書の日常的活用, 読書の推奨, 調べ学習の充実)

○ 読書タイム

全校で、毎朝10分間(8:25～8:35)に「読書タイム」を設定し、学校図書館で借りた本を読む時間としている。読書タイムを通して、児童が読書をする習慣をつけることを目的として取り組んでいる。児童はチャイムが鳴る8:25までに着席し、自ら本を静かに読む。低学年は担任が読み聞かせをすることもある。この時間は教師も児童と一緒に読書をするようにしており、落ち着いて1日の学校生活をスタートするための取組にもなっている。

○ お話宅配便

読書ボランティアを活用した、読み聞かせ「お話宅配便」を全学年で行っている。児童が本に興味をもったり自分から本を「読んでみよう。」と手に取ったりすることを目的に活動を進めている。ボランティアとの間でも読み聞かせをした学級の様子や選書等について交流を進め、お話宅配便が児童にとってより良い活動になるように考えている。

また、自分のクラスでない学級に行き、読み聞かせを行う取組もしている。

○ 学校図書館を活用した学習の充実

学校図書館巡回指導員による学校図書館の整備を進め、児童が使いやすい図書館になるよう環境整備に取り組んできた。また、国語科の授業に合わせて、学級でブックトークを行ったり関連図書を置いたりして、並行読書に取り組みやすくしている。

⑤ 掲示板の活用, 児童作品の掲示

○ 月ごとに掲示板を活用し、取り組んだ学習内容や活動を掲示していく。

自分や友だちの思いや考えを知り、理解できる手段となる。

⑥板書の工夫

めあてがはっきり提示され、授業の流れや児童の思考がわかるものを目指す。

⑦ノート指導

普段から、字の大きさ、空白の作り方、字の色分け、定規の使い方、授業の感想の記述などに気をつけさせる。

⑧めあてとふりかえりの整合性

学習活動において、めあてに正対した振り返りを大切にすることにより、児童は身についた知識や技能を確認し、その学習の意味を理解し、学んだことへの達成感を味わうことができる。そして、次への学習意欲が高まり、学力向上につながっていくと考える。

一方教師にとっても、児童のまとめ・振り返りを素に、授業で身につけるべき力がついたのかを確認することができ、次時の授業に活かすことができる。

単元を見通し、複線型学習も取り入れていく。高学年においては、単元のどこでルーブリックを取り入れ振り返りをしていくかを計画的に行っていく。